

氏名 碓井 喜明
授与した学位 博士
専攻分野の名称 医学
学位授与番号 博 甲第 6357 号
学位授与の日付 2021年3月25日
学位授与の要件 医歯薬学総合研究科 病態制御科学専攻
(学位規則第4条第1項該当)

学位論文題目 Changing trend in mortality rate of multiple myeloma after introduction of novel agents: A population-based study
(多発性骨髄腫における新規薬剤の導入が日米の人口動態統計に与えた影響について)

論文審査委員 教授 頼藤貴志 教授 千堂年昭 准教授 久松隆史

学位論文内容の要旨

2000年前後より多発性骨髄腫(骨髄腫)の治療に新規薬剤が導入され、自家末梢血幹細胞移植(自家移植)を含む殺細胞薬が中心であったそれまでの治療戦略は大きく変化した。死亡率はがん対策を評価するのに有用な指標の一つである。そこで我々は日米の人口動態統計データおよびがん登録情報を用いて1995年から2015年の期間における骨髄腫の死亡率と罹患率の経年変化を評価した。対象期間中、日米ともに年齢調整罹患率は上昇していたが、年齢調整死亡率は日本においては2005年より年変化率-2.5%(95%信頼区間 -2.9% - -2.1%)で、アメリカにおいては2002年より年変化率-2.0%(95%信頼区間 -2.6% - -1.5%)で減少を認めた。死亡率の推移が変化した時期は新規薬剤が導入された時期と合致していた。特に死亡率の改善が顕著であったのは自家移植の適応がないとされる70歳代においてであった。本研究結果により、骨髄腫における新規薬剤の導入は人口動態統計に変化をもたらすほどの影響があった可能性が示唆され、広い対象者に使用することのできる薬剤の開発の重要性が示唆された。

論文審査結果の要旨

2000年前後より多発性骨髄腫の治療に新規薬剤が導入され、自家末梢血幹細胞移植を含む殺細胞薬が中心であったそれまでの治療戦略は大きく変化した。本研究では、1995年から2015年の期間における骨髄腫の死亡率と罹患率の経年変化を用い、新規薬剤導入の影響を評価した。結果として、観察期間中に死亡率の変化が認められており、その死亡率の推移が変化した時期は新規薬剤が導入された時期と合致していた。特に死亡率の改善が顕著であったのは自家移植の適応がないとされる70歳代においてであった。

委員からは、診断基準の変遷やその他の社会的変化が今回の結果に影響を与えたのかに関して質問が出て、明快に回答を行っていた。

本研究は、新規薬剤導入による社会的影響について、重要な知見を得たものとして価値ある業績と認める。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。